Orion

群馬県・群馬大学
「多文化共生研究プロジェクト」
広報紙「オリオン」
第3号
2005年8月17日発行
日本語版

「まち」がキャンパス

群馬県・群馬大学「多文化共生研究プロジェクト」
代表　結城　恵
（群馬大学地域連携推進室職員・教育学部助教授）

課題を「まち」で見つけ、解決の方法を「まち」で実践、成果を「まち」に還元する。これが、本プロジェクトの基本理念です。学生スタッフも、この理念をもって、大学と「まち」を行き来しています。今号がお伝えするのは、自分たちに何ができるのかを自問自答しながら、「まち」のみなさま方に学び、支えられ、歩みはじめた学生スタッフの姿です。

本紙で報告する活動は昨年度のものです。ご協力いただいたみなさまの所属・肩書きも昨年度現在である点をご了承下さい。推敲に推敲を重ね、学生自身の言葉で記述する作業に、何ヶ月もかかってしまいました。しかし、その過程にはさまざまな学びと発見がありました。活動の「今」を届ける広報紙でなく、学生の学びの「今」を届ける広報紙になったことに、どうかご理解をお願い申し上げます。

▲プロジェクト・アドベンチャーの様子。全員が手をつなぎ輪になって座り、その状態から力を合わせて、同時に立ちあがる課題に挑戦しました。

「まちの方々と一緒に何かしたいが、どうしたらきっかけがもてるのだろう」「年齢も職業も生まれたところも違うたくさんの人たちと、どう関わっていけばいいのだろう」――地域に出て活動する学生たちは、こんな疑問や心配を抱くことがあります。群馬大学が主催した「地域貢献活動学生協力者養成講座」（平成16年9月4～6日開講。以下、養成講座）は、そんな学生たちを応援するために行われました。36名の参加者はさまざまな講義を通じ、地域貢献に必要な知識や技能を知り、体験的に学んでいきました。

プロジェクト・アドベンチャーでは、多くの人が力を合わせなくては進まない状況が用意されます。私たちは、工夫して力を合わせることで、予想以上の力が生まれることを学びました。野外炊飯では、ペル一料理と日本料理を一緒に作り、「食」の交流を体験しました。「企画の仕方KJ法」の講義では、アイデアを膨らませ、練り上げる方法を学びました。さらに、地域で活動を展開する「まち」の先輩方から、地域貢献の実際と、その中に盛り込まれた「工夫」と「心」を学びました。

「支えあい」のスナップから

「地域貢献活動学生協力者養成講座」の様子（国立赤城青年の家にて）

今回の養成講座の特徴は、学生による実行委員会が組まれたことです。養成講座の企画段階では「地域貢献活動」への不安と期待や、学びたいことへの希望などを学生の立場から提案しました。開催期間中は、講義室の設営・準備や進行を手伝いました。会場が山間部のため携帯電話の電波が届かず、委員間の連絡がうまくいかないというハプニングにも見舞われました。こうしたハプニングを体験しながら、落ち着いて、工夫して対応することも学んでいきました。

▲実行委員と結城助教授。空き時間を利用してミーティング中。

▲準備も「支えあい」で行います。

「3日間で、どれだけ自分を支えてくれた人がいたのだろうか？どれだけみんなに貢献できたのだろうか？」講座の最後に、本プロジェクト代表の結城恵助教授は学生たちに問いかけました。この3日間で支え、支えられるということを学んだ学生たち。学生たちは3日間で出会ったたくさんの人々から学んだ知恵とハートを受け継いで、まちへとび出していきます。

【瀬谷智】

新連載！ スポットライト ―舞台裏で支える人々―

PCDCの活動は、学生をはじめ、大学やまちの人々の支えによって成り立っています。与えられた一つひとつの役割を果たす、その一人ひとりが大切な存在です。活動を支えるために、どんな人々がどんなことをしているのでしょうか。このコーナーでは、舞台裏で支える人々に光をあてていきます。

第１回：新チーム「アーク」結成！

平成16年10月23日、新潟県中越地震発生。群馬県内でも大きな揺れを感じ、多くの人が不安を抱いた。この地震をきっかけに、群馬県や大泉町、群馬大学などから専門家が集まり、PCDC 防災プロジェクトチームが立ち上がった。そこに参加することになったのが、新しく発足した学生チーム「アーク」である。「アーク」の成り立ちと、5人のメンバーを紹介していこう。

チームリーダーは根岸孝明さん（工学部3年）。「専門を活かして何かやってみない？」阪神淡路大震災の被災者を近親者に持つ結城恵助教授のその一言から、彼は以前から興味のあった防災について調べるようになった。その後、学生に呼びかけて参加者を集め、チーム結成に至った。根岸さんは桐生から大泉へそして荒牧へと足を運ぶことをいとわず、必要とあれば学校に泊まり込んで作業をやりとげるなど、メンバーからの信頼を集めている。

日系ペル一人のネイラ・ルセロさん（工学部2年）は、外国籍住民という立場から防災を考える。防災に関するアンケート作成時など、彼女ならではの意見をプロジェクトに活かし、チームに貢献している。また、メンバーの中で唯一スペイン語が話せる彼女は、翻訳や通訳など、「言葉と言葉をつなぐ架け橋」として大切な役割を果たす。

大泉町での「外国人との協働まちづくりアンケート調査」に協力した、川島則浩さん（大学院教育学研究科1年）。「調査のときに親切に接してくれた外国籍住民のみなさんにご恩返しがしたい！」そんな想いから「アーク」への参加を決意した。役に立ちたいという強い気持ちが、彼のフットワークを軽くする。自ら足を運んで情報を集め、実態を調査する。また、ポルトガル語を自主的に学び、フィールドワークで活かしている。最高学年としてチームを支える彼は、頼れる兄のような存在である。

実家が東毛地域にある小林丈晃（こばやし　たける）さんと増田陽平さん（共に工学部1年）にとって、このプロジェクトは他人事ではない。彼らは地域貢献活動の初心者であり、戸惑いも多かった。しかし、先輩たちのアドバイスを受けながら、チームに貢献しようと懸命に活動に取り組んでいる。今後、「アーク」の中心となって活躍してくれるだろう。

フィールドワークを通して聞こえてくる住民の声、見えてくる実態。外国籍住民の方から「公衆電話や避難場所がどこにあるのかわからない」という声を耳にした。その声に応えるため、「アーク」は役場や外国籍ボランティアの方々からアドバイスをいただきながら、防災マップを作り始めた。防災プロジェクトスタッフの一員として、それぞれが果たす役割は異なるが、めざす目的地は同じ。たくさんの応援を背に受け、方舟（ark）の航海が始まった。今後どんな航路をたどるのか、期待は高まる。

【福田依里】

防災訓練 in 大泉

12月12日、ブラジリアンプラザ前駐車場にて、大泉町役場主催の防災訓練が行われました。この防災訓練は新潟県中越地震がきっかけとなり企画されたもので、外国籍の方を中心に約80名が参加。チーム「アーク」のメンバーも応援にかけつけました。参加者は起震車で地震を体験したほか、消火器の使い方、三角巾を使った手当の仕方、非常食の作り方を学びました。

日本には地震が多く、外国籍の方のほとんどは、震災経験の少なさから大きな不安を抱えています。どこから情報を得たらよいのかわからず、また、情報があっても言葉を理解できないため対応することができません。実際、地震を県内で体験した外国籍の方は「非常に恐かった。避難場所がわからず、パニックになった」と語っていました。役場の方によると、地震が起こった時、あまりに恐くて車の中で夜を明かした人もいたそうです。このような現状を知って、役場の方は今回の訓練を企画しました。

「災害に対する不安をすべて取り除くことはできない。しかし、今日の訓練を生かして、災害が起こったときどのように対応したらよいのかを学んでいただけたら嬉しいです」と語る大泉町役場国際政策課長の対比地啓二さん。訓練を通して災害の恐ろしさを身をもって学ぶことこそが、外国籍の方の災害に対する不安を減らす第一歩となることを改めて実感する貴重な機会となりました。

【加藤千枝】

編　集　後　記

今回は小鳥遊の2年生にとって初めての原稿執筆。何度書いても「企画者の想いが伝わってこない」「参加者の表情が見えない」と原稿の書き直しをさせられる毎日でした。一方、3年生にとっては就職活動と並行しての作業。右手には書きかけの原稿を、左手には履歴書を握りしめ、満員電車に揺られながら推敲を重ねました。書きたいことはたくさんあるのに、うまく表現できないもどかしさ。取材メモを前に悩み、時には自分が腹立たしくさえ感じました。

「この一文をもっと活かそう」「この表現は、こう変えてみてはどうだろう」。白熱した編集会議は週末にも繰り広げられ、ついに完成を迎えた第3号。イベント会場にあふれていた参加者の笑顔がみなさまに届きますように――。

（チーム「小鳥遊」広報紙班：尾久章子（編集長）
片山・加藤・栗原・瀬谷・高橋・福田）

発行元：群馬県・群馬大学「多文化共生研究プロジェクト」
編集担当：チーム「小鳥遊」
監修：結城　恵（群馬県・群馬大学「多文化共生研究プロジェクト」代表）

〒371-8510　前橋市荒牧町四丁目2番地
群馬大学地域連携推進室　結城研究室
Tel/Fax 027-220-7382（ダイヤルイン）
e-mail pcdc@edu.gunma-u.ac.jp

☆多文化共生研究プロジェクトホームページ☆
http://tabunka.jimu.gunma-u.ac.jp/top.html

ご意見・ご感想などございましたら、上記までお気軽にご連絡下さい。

今回の舞台は大泉、桐生そして前橋。
私たちは、驚きと感動にあふれた3つのイベントを体験しました。
学生と参加者の交流、そこから協働の輪が広がっていく様子をご覧下さい。

さあ、「まち」へとび出そう！

～私たちの協働への歩み、それぞれのストーリー～

工学部は大きな理科室 ～群桐祭テクノドリームツアー～

▲身近な道具を用いて、子どもたちにも分かりやすい特別実験を企画して下さった、若松馨（わかまつ　かおり）教授（工学部・生物工学科）。

10月23日、群馬大学・桐生キャンパスがひとつの大きな理科室へと姿を変えた。

毎年群桐祭にあわせ工学部が開催しているテクノドリームツアー。その一環として私たちが企画したのが、外国人学校の子どもたちを対象にした特別ツアーだ。

PCDCとしては平成14年度に続き、今回が2回目の企画にあたる特別実験も行った。学校に理科室がなく、実験などほとんど行ったことのない子どもたちは、私たちの声も耳に入らなくなるほど夢中になって取り組んでいた。顕微鏡での細胞観察では、髪の毛や木の葉など、身近なもののミクロの世界に子どもたちは引き込まれていた。

一方、10円玉を用いた発電実験では、発電が起こらないというハプニングが起こった。若松教授や、スタッフが見守る中、子どもたちの挑戦は何度も繰り返された。すると数分後、「検流計の針が動いたよ！」「電気が起こったんだ！」と子どもたちの元気な声。気が付くと、実験室が子どもたちの成功の歓声と学生の拍手で溢れかえっていた。

初めからこのような、楽しい雰囲気があったわけではなかった。「外国籍の子どもたちとうまくコミュニケーションをとれるかな？」初めは学生スタッフと子どもたち、お互いに手探りの状態からのスタートだった。だが、Amigos※や留学生ら、通訳スタッフのおかげで、昨年の課題でもあったコトバという距離を少しずつ縮めていくことができた。彼らの協力もあり、子どもたちと学生スタッフが仲良く会話をしているシーンが多く見られた。

イベント終了後、外国籍の子どもたち、通訳の学生スタッフからも、「ぜひ来年も参加したい！」という声がたくさんあがった。みんなの気持ちは、すでに来年のテクノドリームツアーへ向かっている。また、「僕は将来大学へ進学し、もっと科学を勉強してみたい」という夢を話してくれた子どもたちがいた。テクノドリームツアーは人と人、そして現在と未来をつなぐ科学反応をも起こしたようだ。

【高橋広樹】

▲今回ツアーに参加してくれた、イスパーノ・アメリカーノ（ペルー学校・伊勢崎市）、コレージオ・ピタゴラス・ブラジル太田校（ブラジル学校・太田市）の子どもたち、計39名。

※Amigos（アミーゴス）…東京外国語大在日外国人交流ネットワーク。

みんなでつくり出す絵本の世界 ～大泉発「おはなしがつながる・おはなしでつながる」～

「ちゅーちゅー」「ぴよぴよ」「ぶうぶう」動物たちの鳴き声が聞こえてくる。「かっぱらっぱかっぱらった」と手拍子をとりながら、リズミカルな群読が始まる。「うんとこしょ！どっこいしょ！！」この日一番の大きな声が響き渡った。

12月12日、大泉町立図書館にて開かれた読み聞かせイベント「おはなしがつながる・おはなしでつながる」。このイベントは図書館からの依頼で、チーム「フレンドシップ」が企画したものである。当日は、子どもとその保護者ら約100名が参加した。

響き合う声・通い合う心

「むかしむかし…」と学生たちによる読み聞かせが始まった。十二支にまつわるおはなしや動物の鳴き声がとりかえっこされる物語。子どもたちは次々と登場する動物たちにうれしそうに反応し、学生と子どもたちの声はどんどん大きくなっていく。絵本に出てくる動物たちの鳴き声は、学生の声から、いつしか会場中の声に変わっていた。

読み聞かせの次は「とりかえっこ」ゲームだ。これは、「とりかえっこ」の物語のように自分と相手の動物の鳴き声を交換するというもの。これは、物語をもとに学生たちが考えた。最初子どもたちは、初めて出会う相手に少し戸惑い気味だった。そんなとき、学生の「とりかえっこしよっか！」という声が子どもたちの不安を吹き飛ばした。「ぴよぴよ」「わんわん」と鳴き声が「とりかえっこ」され、子どもたちは次の相手を見つけようと自ら動くようになっていく。恥ずかしがる様子はもうなく、鳴き声を出して笑い合う子どもたちの間には、心の通い合いが生まれていた。

創り合う絵本の世界

最高の盛り上がりを見せたのが、最後の「大きなかぶ」。学生が「手伝ってくれる人！」と呼びかけると「はーい！」という元気な返事とともにたくさんの手が挙がった。舞台にあがった子どもたちは、フロアーの子どもたちの力強い「うんとこしょ！どっこいしょ！」の声援をうけ、懸命にかぶを引き抜こうとふんばる。絵本の世界は、声とともに会場中に広がっていた。

本番後、「子どもたちの明るい反応に助けられた」というフレンドシップのメンバーの声を耳にした。「子どもが笑っている姿をみると自分も嬉しくなる」と語る保護者の声も聞こえた。読み聞かせでの学生と子どもたちによる声の響き合いと心の通い合い。絵本の世界を創り合う中に「おはなしでつながる」人たちの姿があった。

【片山雄介】

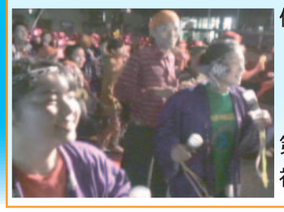
※読み聞かせ…今回の「おはなしがつながる・おはなしでつながる」は、元群馬大学教授高橋俊三先生の講義から学んだ「群読」の手法を取り入れたもの。一方的に学生が語るのではなく、子どもたちとの積極的なコミュニケーションを図る工夫もされた。

垣根を越えて響いた大きなかけ声 ～だんべえ踊り in 前橋まつり～

10月10日、夜の前橋市街地。大きな音を出しながら発電機が動き出す。強い光で浮き上がる人々の顔。さまざまな団体が列を作り並ぶ中、緊張した面持ちでスタートを待つ姿がある。手作りの鳴子を握り締めたPCDCの学生メンバー。今回は新しいメンバーも加わっている。私たちが誘った明石塾※の生徒さんたちだ。スタートを告げるアナウンス。参加者全員でのカウントダウンが始まり、同時にBGMが流れる。いよいよだんべえ踊りがスタートする。

＊　＊　＊

BGMが聞こえなくなるほどの大きな歓声が上がり、一斉に全ての団体が踊りだす。空を仰ぐ何本もの幟（のぼり）と響き渡る鳴子の音。「そうだんべえ！」声と踊りが空間の温度を上げているようだ。いつのまにか学生の顔から緊張の色は消えていた。前日の台風が残していった雨。人々の躍動がその雨粒をはじく。次第に、踊りの勢いを上げるような変化が表れた。ある一人の学生が無意識に前に飛び出し、他の団体に混ざって踊り始める。



そこからだ。

最初に区切られていた列が次第になくなっていく。お互いに視線を交わし、一緒に声を張り上げる。そんな場面が増えてきた。ある学生は先頭に立ち、後ろを振り向いて大声で盛り上げる。隣にいた「だんべえナイトエンジェルス」のメンバーに踊りを教えてもらう明石塾の生徒さんもいる。踊り終わった後に交わすハイタッチや、地域の方と肩を組んでこちらに向けるピースサイン。数十分踊っただけだが、仲間意識が確実に芽生えていた。

＊　＊　＊

一日中カメラを回し、感じたことがある。ファインダー越しに見えたもの、それは人の姿だけではなく、自然に生まれていた一体感だ。「またやりましょう」「何か一緒に新しいことができそうですね」。踊りを終えた後、どこからともなくこうした言葉が聞こえてくる。何かを「まち」の人たちと一緒にすることができる。その気持ちを私たちは共有していた。———祭りが終わり、興奮冷めやらぬ中。無意識のうちに次の企画を考え始めていた。

【栗原健児】

※明石塾は、群馬県総務局国際課が主催する事業で平成14年8月6日に群馬県立女子大学外国語教育研究所長（元国際連合事務次長）の明石康さんを塾長として開塾した。「国際舞台で活躍できる、高い志と行動力に富んだ若者を育てる」ことを目標として、毎年県内高校に在籍する10名が研修を受けている。本プロジェクト代表結城恵助教授がこの塾の講師をつとめていることから、本学学生と塾生の交流が始まった。